

# アンコール・ワット西参道修復工事完了

## カンボジア王国政府主催 祝賀式典、渡り初め儀式行われる



石澤教授を挨拶する  
(©カンボジア王国政府提供)

日本カンボジア友好70周年を迎えた今年、11月4日にカンボジア・シェムリアップでアンコール・ワットの西参道開通を祝う式典および「渡り初め儀式」が同国政府主催の国家行事として執り行われた。元上智大学長、アジア人材養成研究センター所長の石澤良昭教授を中心とする、本学の33年にわたるカンボジア人の遺跡保存官養成と西参道修復工事が完了し、長年、石澤教授などが登壇した。国内外の来賓、関係者、国民の総勢約1000人が西参道前の会場を埋め尽くし、盛大で華やかな式典と「渡り初め儀式」が繰り広げられた。

石澤教授が挨拶に立ち、「カンボジア人による、カンボジアのための、カンボジアの遺跡保存修復」を国際協力の哲学に掲げ、ソフィア・ミッションとして遺跡保存官の養成と遺跡保存修復を展開してきたこれまでの経緯を国王陛下にお伝えした。そして「何よりも、カンボジアから水や石の問題、保存修復の理念の問題、アンコール王



シハモ二国王陛下の渡り初めをする  
(©カンボジア王国政府提供)

のために、今後本学とアプサラ機構は、西参道の定期的な保守管理およびカンボジア人遺跡保存官の人材養成支援を継続していく。

■ 上智大学とアンコール・ワット西参道修復工事

参道は、参詣者がアンコール・ワットの中央尖塔に向かうために設けられた環濠を横断する出入り口にあたり、過去に幾度か崩壊し、修復が繰り返されてきた。

本工事で中心的な役割を果たしてきた石澤教授は、内戦で失われたカンボジア人遺跡保存官の人材養成のため、1991年からアノンペン王立芸術大学で考古学、建築

# 2023年度創立記念行事 創立110年を振り返る

## 先哲祭ミサ・創立記念プログラム・永年勤続者表彰

今年、本学の創立110周年という節目を祝う「サ・創立記念プログラム」中、11月1日に上智学院 永年勤続者表彰が行われた。学院の一層の発展に向けて、あらためて本学のミッションを再確認する機会となった。

■先哲祭ミサ  
カトリック圏 町聖イグナチオ 教会主聖堂で、サリ・アガステイン神父(上智学院理事長)の 主司式にて行わ

先人の功績をたたえるミサ

た。学院の一層の発展に向けて、あらためて本学のミッションを再確認する機会となった。

■先哲祭ミサ  
カトリック圏 町聖イグナチオ 教会主聖堂で、サリ・アガステイン神父(上智学院理事長)の 主司式にて行わ

先哲祭ミサは、今日の本学の発展の礎となった先人の功績をたたえるために行われる。「わたしたちが For Others, With Othersの精神をさらに深く身につけ、平和な世界を造ることができるよう」との祈りが捧げられた。また感謝の典礼の奉納祈願では、創立110周年を記念した供え物が捧げられた。

■創立記念プログラム  
「互いを知る、上智を語る、未来を考える」を

テーマに企画。「大学創立と戦前期の歴史を振り返る」など対面とオンラインを取り混ぜ、創立110周年と関連付けた6つのプログラムが行われた。各プログラム会場で記念動画が流れ、110年のあゆみを振り返った。

■永年勤続者表彰  
勤続25年および15年の教職員が表彰を受けた。アガステイン理事長は「長年にわたり、上智学院のために尽力くださったことを感謝いたします。今後とも建学の理念、教育精神のもと、本学のさらなる発展のために力添えをお願いしたい」と述べた。続けて、永年勤

続者を代表して横山恭子(総合人間科学部心理学科)教授が挨拶に立ち、上智大学在学中や、学生たちとのエピソードを紹介。「自分で学ぶ楽しさを教えてくれた上智大学に感謝したい」と話した。

本年度表彰された永年勤続者は次のとおり。

※( )内は所属。敬称略。

【勤続25年(17人)】  
服部隆(国文学科)、小倉博孝(フランス文学科)、横山恭子(心理学科)、西澤茂(経営学学科)、谷洋之(イェスピア語学科)、ジェームス・ファーラー(国際教養学科)、岡田邦宏(物質工学科)、矢入郁子(同)、

明(機能創造理工学科)、後藤貴行(同)、桑原英樹(同)、中島俊樹(情報理工学科)、炭親良(同)、川端亮(同)、須田誠一(人事担当理事付)、中村史子(ソフィア連携室)、草原恵(入学センター)、藤本智絵(短期大学部事務センター)

【勤続15年(25人)】  
武田なほみ(神学科)、岡田隆(心理学科)、近藤広紀(経済学科)、杉谷陽子(経営学科)、エルウェ・クレーショ(フランス語学科)、スウェン・サー(入学センター)、田畑真白(SFD P推進室)、伊藤薫江(短期大学部事務センター)、我部政貴(目白聖母キャンパス事務センター)

学を学ぶ大学生のために集中講義を開始。1996年、西参道第1期工事の着工と同時に、シェムリアップ市内に上智大学アジア人材養成研究センターを建設し、修復工事現場に寄り添いながら、今日まで33年間にわたり保存官養成に尽力してきた。現在、石澤教授の教え子たちは、大学教員や官僚など、同国の文化財・遺跡保全に係る分野をけん引する人材として活躍している。

石澤教授の業績と貢献は高く評価され、アジアのノーベル賞とも言われる「フロン・マガサイサイ賞」や「カンボジア王国友好勲章(サハメトレイ Grand Croix)」大十字章」等を受賞している。

学生時代も、教員になつてからも、自分には「上智」に育てられてきた気がします。本来は、勝手に育たなければならぬのですが、どうしても育てられた部分を否定することができません。この場合の「上智」は、私にとっては、上智大学といつた「法人」ではなく、これまで出会ってきた「個人」の合計です。もちろん上智大学という場がなければ、出会いもあり得ないのですが、やはり人あつての上智だと思えます。

私もお世話になった先生がいっぱいいます

エズス会士の先生方がいらっしゃるいました。最後はいつも、その「背中」で説き伏せられていたような気がします。いつも根気強く見守ってくださっていたわけですからね。教員になった私にそんな説得力のある「背中」があるのかどうか、二十五年経っても、忸怩たる思いばかりです。とはいえ、もはや「背中」だけでは通じないのだとも感じます。日々の授業のなかで自分はどう対話しているのか、教室で先生の顔を見ながら考える毎日です。



## 勤続25年、私にとっての上智

文学部国文学科教授 服部隆

第一部は、永野良博言語科長の総合同会で、シンポジウム「上智大学短期大学のSDGsへの取り組み」を開催した。はじめに、総合人間科学部教育学科の杉村美紀教授が、「持続可能な未来に向けた人々の学びとコミュニケーションの連帯」をテーマにパネルディスカッションを行った。第一部、第二部とも盛況のうちに幕を閉じた。

12月2日、上智大学短期大学部創立50周年記念式典が、秦野キャンパス4号館大教室で執り行われた。

第一部ではまず、山本浩短期大学部学長が式辞を述べ、1973年に開

学した上智短期大学が、2012年に現在の「上智大学短期大学部」に名称変更してからの約10年の歩みを振り返った。山本学長は、短期大学部と上智大学の連携強化、教育の質保証推進、サービスマニエールに代表される多文化共生力の修得など目標に沿ったさまざまな改革を詳しく説明し、25年度の学生募集停止後も変わることのない水準の教育と支援を行っていくと決意を語った。

来賓として参列した秦野市長の高橋昌和氏、短期大学部ソフィア会長の平野由紀子氏の祝辞に

続いて、高橋氏、平野氏およびソフィア後援会会長の川田吉江氏の3人に感謝状が贈呈された。

次に、上智学院を代表してサリ・アガステイン理事長が挨拶に立ち、1973年当時の上智学院理事長であるヨゼフ・ピタウ大司教と、理想の女子教育を目指す聖マリア修道女会との運命的な出会いによって上智短期大学が開学したことや、初代ジェラルド・バリー学長から現在の第8代山本学長まで歴代の学長が進めてきた数々の取り組みを紹介した。そして、これからは短期大学の教えは卒業生の中にも継承されると述べ、50周年を記念する感謝の言葉を締めくくった。



式辞を述べる  
山本学長